医者ともあろうものが…

見川鯛山

医者ともあろうものが…

見川鯛山

毎日新聞社

著者略歴

本名見川泰山。大正五年，栃木県安蘇郡植野村に生れる。植野小学校，県立佐野中学校の少年期をフナ釣りと目白とりに熱中しておくる。

先祖代々が医者で，その十八代目。祖先に，聖医，名医続出せるも，十六代泰雲，十七代泰蔵にて名門のホマレを終り，十八代泰山はついに“山医者”へと零落す。数少ない博士でない医者のなかの一人。

ただし，狩猟，木登り，アユ釣りは鬼才。

栃木県那須高原の住人。

医者ともあろうものが…

一九七三年七月二五日　第一刷
一九九三年六月三〇日　第二〇刷

著者　見川鯛山
編集人　吉田俊平
発行人　田中正延
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇-三六　大阪市北区梅田
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　正文社

落丁・乱丁の本は、小社でおとりかえします

© TAIZAN MIKAWA Printed in Japan 1973

ISBN4-620-10390-X

医者ともあろうものが…

目次

I

婆ッぱ　二
かたき討ち　六
ウメ　三
嫐？　元
私に関係のない話　四
公民館　元
けものきず　四
鮎　四
私はすこし働きすぎている　三
キン　五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

メデタイ日　六四
ガス室　七二
骨　七六
ミモザの美人　八一
テッポウ三治郎　八八
おチンチン　九三
手術中　九九
オ手柄　一〇三
おかげさま　一〇八
畏れおおくも　一二三

Ⅱ

旗 二九
オルガン 二三五
ナンバーワン 二三〇
四月馬鹿 二三七
閣下 二四一
郭公 二四五
悪日 二五〇
でれすけ 二五六
芋 二六〇
自然薯 二六五

Ⅳ

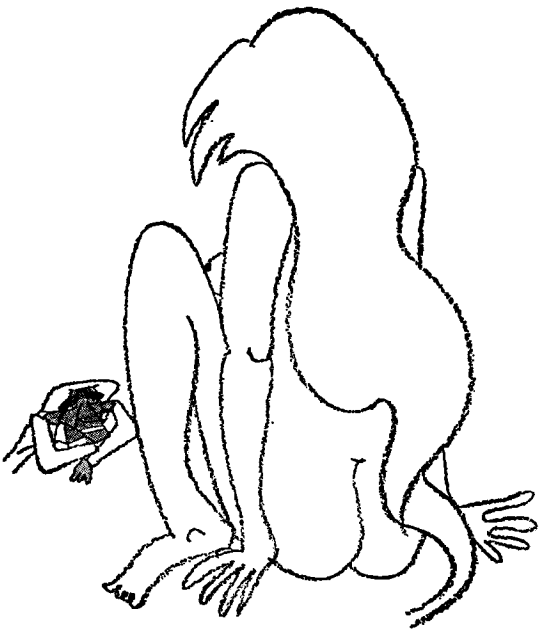
オ元日　一七二
鮎釣りに関する、特に変形鉤の功罪　一七六
暗い場所　一八〇
別荘のヒト　一八五
ウチの情婦　一九三
コオロギ　一九八
診断書　二〇五
留の野郎　二一〇
悲しい日　二一六
あとがき　二二〇

装幀
カット　おおば比呂司

医者ともあろうものが…

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

I



婆ッぱ

オ辰婆さんはシブトイ婆さんである。あと二、三日の生命(いのち)だと私が引導を渡してから、もう半月にもなるのに、まだ死なない。私の差しがねで親戚や一族郎党も集めたし、葬式の用意も万端ととのえてしまったのに、早いとこ死んでくれないと、医者として私は本当に困ってしまう。

婆さんはもともと茶目ッ気がおおく、ヒトをヒトとも思わぬ女だった。この場に及んでも私を困らせて喜んでいる。

あの日、たしかに婆さんは死にかかっていた。薄暗い裸電球の納戸の中で、湿った重い布団を苦しそうに剝(は)いで、意識はなかった。干涸(ひから)びた骨だらけの胸をフイゴのように動かしながら、ヤット生きていたのだった。おまけに、オ辰婆さんは九十三歳である。

私はずいぶん人を殺してきたので、人間の死ぬ時間を割に正確にアテられるのが自慢である。だから家族に云ってやった。

「ま、ナンダな、これも寿命だ。人間ここまで生きられたら本望だぞ、赤飯でも炊いてニギヤカに葬式やるんだナ」

すると七十二歳のアト取り息子も云った。

「俺も、ぜひそうしてヤッペと考えてるだ。婆ッぱはハア思い残すこたァねぇだ。食いてぇ物ァ食って、云いてぇこたァ云って、悪タレべぇついてたが、もうオシメェだな。去年の暮にァ玄孫も生れたし、曾孫なんざァ三十の余もいるだ。家じァ天皇陛下みてぇに威張ってたもんなァ。先生にァずいぶん世話ンなったが、よくもまァ今日まで生きてたもんだワイ」

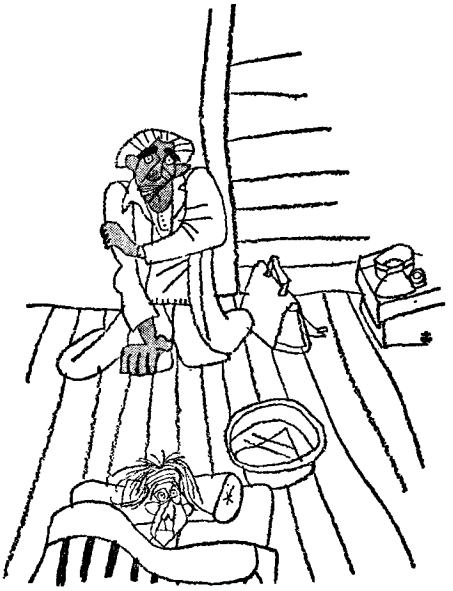
傍から嫁様も云った。六十九歳だ。

「婆ッぱさん先生の顔見せぇすると、悪タレべぇついてたけんど、カゲじゃ誉めてただ。アノ医者、世間で云うほどのヤブでねぇって……」

オ辰婆さんは、豊かな農家の家付き娘だった。だから我儘で気位がたかく、勝ッ気だった。雪ぶかい東北の山家の娘らしくない気品と、色白でナメラカな肌が自慢だった。

二十五年前この村へ引っ越してきた私は、まだタッタ六十八歳の、若いオ辰婆さんとすぐ仲よしになった。

「な、ホレよく見てみろ、乳だのコノ尻のあたり、まァだミズミズしかっペ？　オレこれから若



ぇ婿様めっけべぇと思ってるだ。メグリはとっくに止っちまったが、まァだまァだオレ女だワイ、ヒッヒッヒッヒ……。

見たとこ、アンタも若ぇようだが、オメなンしてこんな山ん中サやって来ただ？　若ぇもんは町サ行かねぇば駄目だ。町で出世しねぇば駄目だぞイ。オメも町サ出て、デッケぇ病院おッ建てねぇばダメだ。若ぇもんはデッケぇ事しねぇばいけねぇだ!!」

婆さんは、いつも私をケシかけるのだったが、私はこの山里に小さな根ッ子をはやし、小さな診療所を建て、小さな事ばかりやっていた。だから、とうとう婆さんがサジを投げた。

「ナンテ情けねぇ医者様だオメェは!! まァ好きなようにしろ、オメがここに居てくれりァ、村の衆も助かるだっペからョ……」

口の悪い婆さんだった。

半俵集落へ往診すると、私はかならずオ辰婆さんの家へよった。すると婆さんは、ちっともミズミズしくないシワ苦茶の手で蕎麦を打ち、地面を舐めるように腰をまげて背戸の茗荷を摘みにゆき、うまい汁を煮てくれるのだった。

「どうだウマかっペ? オメ俺こと殺しちまったら、こうだに美味え蕎麦、ハァ食えやしねぇだぞ、サァうんと食ってげ、まァだナンボでもある」

オ辰婆さんは背中を丸めて小さく坐り、下から私の顔をのぞきこんでニコニコしていた。

オ辰婆さんに引導を渡したその日、私は最後の呼吸をヤットつづけている婆さんの軽いシワだらけの手をさすりながら、長いあいだ目を閉じて坐っていた。

九十三年間、この暗い納戸で寝起きしてきた婆さん、婆さんが拭きこんだアメ色の板戸、重々しく黒びかりした欅の柱、そこでニシンや塩鮭を焼いた炉端、すすけた太い梁、月の表面みたいな小さな凹凸のある広い土間、その向う側の馬小屋で鼻を鳴らすウマ、婆さんがヨチヨチ歩きの幼いころから目で見、嗅ぎ、聞き、手で触れてきたこの家のすべてに、オ辰婆さんの年輪がくろ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com